

26期生の皆様ー8

秋晴れが続いていますが、それでもときどき雨が降ります。秋は一雨ごとに寒くなりますので、体調管理には気をつけて下さい。

さて、今回はキリスト教の前にユダヤ教が起こったが、そこではメシアの到来が予言されていた。それがどんなお方かについては色々な考えがあり、イエスの時代にはメシア＝王様という考えが広がっていたことを見ました。今回もまた旧約聖書の預言を紹介します。直接読むのはしんどいですが、ちょっと辛抱して下さい。

勇ましく強い王が来て、外国人の支配からユダヤ人を解放してくれるという期待は、ローマ帝国の支配下で苦しんでいたイエスの時代、ますます強くなっていったのはある意味で当然のことです。それゆえ、イエスがうっかり自分はメシアであると言うなら、民衆は熱狂して彼を王にし、ローマ帝国に対する反乱が起こす危険がありました。実際に福音書によれば、イエスがパンを増やして大勢の群衆に与えた後、「人々はイエスの行われたしるしを見て、『まさにこの方こそこの世に来られるはずの預言者だ』と言った。イエスは人々がやってきて王にするために自分をむりやり連れて行こうとしているのを知り、ただ一人また山に退かれた」（ヨハネ、6章14～15）。

またその時代、「わしこそはメシアや、俺について来い」と叫んでユダヤ人を蜂起させた扇動者が何人も現れました。それらの反乱は地方の駐屯軍によって平定されたのですが、67年に起こった反乱（ユダヤ戦争）は地方の軍隊を打ち破り調子に乗って「独立」を叫んだので、当時世界最強のローマの軍隊がやってきて、70年にはユダヤの国を滅ぼし首都エルサレムを破壊するという世界史上希に見る悲惨な結末になりました。この戦争の始終を目撃したヨセフス

（37～100年頃）というユダヤ人がいます。この人は最初ユダヤ軍の指揮官として戦いますが、降伏して捕虜となり、ローマに連行され皇帝に仕えることになり



第1次ユダヤ戦争

ます。ローマで「なんでわしらはこんな目に会ったんやろ」と考えながら、ユダヤ民族の歴史を書きました。その本の中で、このユダヤ戦争が起こった理由を次のように述べています。「ユダヤ人をとくに戦争へと駆り立てたのは、聖なる文書（聖書）にも書き記されているものの、その意味が明瞭でなかった一つの予言、すなわちそのころ彼らの国から世界を支配する者が出るという予言だった。彼らはこの予言の人物を自分たちの民族の者を意味するものと解したが、賢者の多くはその解釈にとどまっていた。実際のところ、この予言は、ユダヤの地で皇帝に推戴されたウェスパシアノス（ユダヤの反乱を鎮圧し、後にローマ皇帝になった）の覇権を意味していたのである」（『ユダヤ戦記』、VI,5）。つまり、「反乱の原因はユダヤ人が予言を信じて解放者としてのメシアを待ち望んだことだ。しかし、メシアはユダヤ人ではなく、ローマ皇帝だったんだ」と解釈しているわけです。

ヨセフスが言うように、メシアについての予言は様々な解釈が可能でした。メシアは王であるにしても、謙遜な王とか正義と平和の王であるという記述も多いです。たとえば、「エルサレムの娘よ、喜び踊れ。見よ、王が来られる。正しい者、勝利の者が。彼は謙虚なもので、ロバに乗ってこられる」（『ザカ

リア』9章9)。

あるいは、メシアは王というより「預言者」であるという予言もあります。アブラハムに始まったユダヤ教は、紀元前13世紀モーセという人によって宗教として形を整えます。モーセは神から十戒や他の種々の掟を授かり、祭司職を作り、儀式を定め、また經典(聖書)を編纂しました。ですから、ユダヤ教はモーセの宗教とも言います。そのモーセが死の直前「主はおまえの兄弟の中から私のような預言者を民のために立てられるであろうから、その者の言うことを聞け」(『申命記』18章15)と言い残しました。モーセはユダヤ人の歴史の中で出た最大の預言者ですから、彼のような預言者とはメシアのことではないかと考えられます。

メシアが王であろうが預言者であろうが、どちらにしても権威ある人には変わりがありません。ところが、予言の中には力強い王様や権威ある預言者とはかけ離れたメシア像もありました。それは苦しむメシア像です。その最たるものが、イザヤによる「主のしもべの歌」の四つ目に示されています。

「彼には私達の目を引くほどの美しさも輝きもなく、楽しめるほどの姿形もない。彼は人から軽蔑され、捨てられた苦しみの人、苦しみになれた人。その前では顔を覆いたくなる、そんな人のように見下され、無視された人。実に彼は私達の労苦を背負い、私達の苦しみを担った。私達は彼を神に罰せられた者、打ちのめされ、さげすまれた者と考えた。彼は私達の罪のためにつきさされ、悪のために押しつぶされ、私達を救う罰が彼の上に襲いかかり、その傷のおかげで私達は癒やされた……主はみなを罪を彼の上に負わせられた。非道に扱われた彼は身を低くし、口を開かず、屠所に引かれる子羊のように、……口を開かなかつた。拷問と裁きによって彼は奪い去られた」(53章。このほか、50章5~7)。

ダビデ王の作と言われる『詩編』21篇にはもっと驚くべき人が出てきます。「私はウジ虫で、人間ではない。人間の恥、民のくずだ。私を見る人はみなあざけり、口を曲げ、頭を振る。『彼は主によりたのんだ。主が彼を救うだろう』……苦悩は私に迫り、助けてくれる者はない。……私の上あごはかわらけのように乾き、舌はのどにつき、死のちりのなかに横たわった」と。この苦しみにあえぐ人がメシアであるとは言われていませんので、ユダヤ人何について話しているのかよくわからなかったかも知れません。のちにキリスト教徒は、これが十字架上のイエスのことだと考えました。

メシアが生まれる場所の指定もあります。「エフラタの地ベトレヘムよ、おまえはユダの家族の中で最も小さな者だが、イスラエルを治める者がおまえから生まれねばならぬ。その出はずっと以前、昔の日々に遡る」(『ミカヤ』5章1)。

このように様々な像をもつメシアが到来するという期待感はいエスの時代にとっても強くなっていました。そのことはローマの歴史家も伝えています。ローマ皇帝の伝記を書いたスエトニウス(70~130)という人は「世界を支配する者がユダヤから出てくると、世界の運命の中に書きこまれているという古代からの根強い意見が、オリエント中に広がった」(『ローマ皇帝伝』)と言っていますし、『年代記』や『ゲルマニア』で有名なタキトゥス(120年頃没)は「その頃、東方世界が力を得、ユダヤから出現した人々が世界を所有するに違いないという古代の祭司の著作に書かれたことを信じる者が多数いた」(『同時代史』、5巻13)と述べています。

このようにユダヤ人たちがメシアを今か今かと待っていたときに、イエスが現れたのです。いや、その直前に洗礼者ヨハネが現れ、人々の熱狂を誘います。